The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヨーゼブ・ラスカ（1886〜1964）と宝塚交響楽団
Author(s)	根岸, 一美
Citation	待兼山論叢. 美学篇. 1998, 32, p. 1-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48213
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヨーゼフ・ラスカ(1886〜1964)と宝塚交響楽団

根岸一美

1. はじめに

私が宝塚交響楽団[1]の名前を初めて知ったのは、日本におけるブルックナーの作品の受容を調べる仕事においてであった。私は「リンツ・アントン・ブルックナー研究所」からの依頼をうけて1991年9月の「ブルックナー・シンポジウム」(毎年オーストリアのリンツ市で開かれる催しで、この年は「ブルックナー受容」がテーマとされた)で発表することになり、その調査のための一つの資料として小野寺昭爾編『日本におけるアントン・ブルックナーの交響曲全演奏記録』(日本ブルックナー協会発行、1978年)を入手した。その中に、交響曲第4番、同第1番、そして《テ・デウム》が、ヨーゼフ・ラスカと宝塚交響楽団によって日本で初めて演奏されたことが示されていたのである。私はより詳細な資料を得るべく宝塚歌劇団に問い合わせたところ、宝塚交響楽団関係の資料は、大阪府池田市にある財団法人阪急学園池田文庫に所蔵されていると知らされた。そこで同文庫を訪ね、演奏会の案内チラシ、プログラム、会員向け冊子、新聞記事切抜帳等、さまざまな資料を見せて頂き、まず上記シンポジウムの発表のために必要ないくつかの材料を得た。また当時仕事を進めていた著述においても、この調査の成果を示すことができた。[2]

ラスカその人については、このシンポジウムの発表のために十分な情報を得ないまま当日を迎えたが、リンツ滞在中に同市の市役所を訪ねたとこ

ろ、関連する新聞記事のコピーをいくつか頂くことができた。その中に“Joseph Laska　Ein oberösterreichischer Komponist”と題するJohannes Unfriedという人物による事典項目的な文章があり、それによってラスカが多数の音楽作品を残していることをも知った。[3)]

その後、こんどは池田文庫より、今までの仕事で扱った資料について紹介記事を書くことを依頼された。そこで「宝塚交響楽協会の活動に関する未整理資料について」と題する調査報告[4)]を書き上げたが、その終わりに、私はこれからの課題として、1）定期演奏会の演奏曲目と演奏者の完全な掘り起こし、2）池田文庫に所蔵されている（であろう）楽譜資料の調査、そして3）ラスカの作曲家としての活動の調査が必要であると述べた。本論はこの「課題」をふまえ、新たな研究の経過ならびに結果について報告するものである。宝塚交響楽団の定期演奏会が開始されたのは1926年（大正15）9月18日のことであったが、その礎石を築き、常任指揮者として強力にこの演奏会を押し進めていったのが、ラスカである。そこで最初に彼が定期演奏会を始めるまでの「前史」を述べておきたい。

2．宝塚交響楽団定期演奏会が開始されるまで

ヨーゼフ・ラスカは1886年2月13日に、オーストリアのリンツで生まれた。[5)] 父親ユーリウス・ラスカは当時、リンツ劇場の監督を務めており、母親はオペラの歌い手であった。ラスカはクレムスミュンスターのギムナージウムを卒業後、リンツの歩兵連隊における志願兵としての1年間の勤務を経て、ミュンヘンの王立音楽院に入学した。ここではフリードリヒ・クローゼから作曲を、フェーリクス・モットルから指揮法と総譜奏法を、フェーリクス・ベルトルト・ケラーからピアノを学んだ。モットルはブルックナーのウィーン楽友協会音楽院における生徒であったから、ラスカはブルックナーの孫弟子ということになる。ラスカは卒業後いくつかの町の

劇場で指揮者として勤めた後に、1913年から1914年にかけてプラハのドイツ劇場においてアレクサンダー・フォン・ツェムリンスキーのもとで指揮活動を続け、エッセンならびにニュルンベルクの劇場とも契約を結んだ。しかし第１次世界大戦の勃発とともに兵役に就き、1916年８月10日、彼は捕虜となった。そして1917年にはシベリアに移されたが、６年間ウラジオストックにおいて捕虜の身分のまま、指揮者としての活動を行い、男声合唱ならびに弦楽オーケストラを指導した。1923年（大正12）、彼は日本に赴くことに成功し、東京帝国ホテル社長・大倉喜七郎男爵らが創設した東京シンフォニー・オーケストラの指揮者として迎えられた。しかし同年９月１日に起こった関東大震災のため、関西に移ることになった。

ところで1914年（大正３）４月１日に第１回公演の幕をあけた「宝塚少女歌劇」（当時の名称。1940年（昭和15）10月より今日の「宝塚歌劇」に改められた）に、専属のオーケストラが設けられたのは1921年（大正10）のことであった。この年の10月に歌劇が花・月の二組構成になり、それまでのように生徒たちに舞台とオーケストラの双方を勤めさせることが困難となったために、歌劇団の音楽教師や生徒のほかに男性奏者を雇い入れ、花・月の二つの管弦楽部が作られたのである。こうした状況のなかで、音楽家としての独自の仕事への情熱が高まってゆき、1923年（大正12）８月19日（日）午後１時より、宝塚温泉パラダイス音楽室にて、「宝塚音楽研究会」が開催された。この演奏会では第一部に合唱、ピアノ独奏、童謡歌唱、チェロ独奏、独唱、管弦合奏が行われ、第二部では合唱、ピアノ三重奏、二部合唱、童謡、ヴァイオリン独奏、独唱、そして管弦合奏が行われた。池田文庫に保存されているプログラムのタイトルには「(月組生徒演奏)」と記され、前半後半各最後の管弦楽は「月組管弦部」と記されているので、とくに月組の人たちが熱心であったのかもしれない。この「宝塚音楽研究会」の演奏会はその後同月26・31日（両日とも同一内容。最後に

ロッシーニの《ウィリアム・テル》序曲が演奏されている)、9月2日(これも前2回とほぼ同じ内容)と、順調に続けられていった。その後に関西に移ってきたラスカは、早くも9月16日の研究会に登場したもようで、池田文庫所蔵のこの日の演奏会プログラムには鉛筆書きで「番外ラスカ氏ピアノ」と記されている。このときに何を弾いたのかは判らないが、すでに劇団との何らかの関係が始まっていたことを示す出来事であろう。

10月16日、ラスカは宝塚音楽学校の教授に就任した。そして10月21日の演奏会には研究会に正式な資格で出演し、自作の《プレリュード》を演奏している。続く28日の演奏会ではヴァイオリンの東儀哲三郎ならびにチェロの竹内平吉とともにベートーヴェンのピアノ三重奏曲[変ロ長調作品11]を演奏し、3人は同じ曲を10月31日、11月4日にも演奏している。なお10月31日から、会場はそれまでの「音楽室」から「小劇場」に改められている。

ラスカは続く11月11日、18日、25日にラフマニノフの《プレリュード嬰ハ短調》を独奏し、12月2日には当時のスター歌手であった高峰妙子とフォルクマンの《ハンガリアン・オバチュア》(ハンガリー序曲)をピアノ連弾している。12月9日には「ピアノ独奏」を行っているが、曲目は記されていない。

年が改まり、1924年(大正13)には元日から演奏会が行われた(「自一日至六日」)。また同1月13日には「宝塚音楽歌劇研究会」主催による演奏会が行われているが、会の名称が変わっているのは喜歌劇(《人格者》と題する日本人の作品)が含まれていたための処置と思われ、同月26日、27日も同じく「宝塚音楽歌劇研究会」となっている。これらの演奏会のプログラムにラスカの名前は見られないが、指揮者として出演していたかもしれない。

しかし翌2月8日の演奏会は、宝塚交響楽団の創設にむかう重要なステ

ップとなった。この日は再び「宝塚音楽研究会」の演奏会として行われたが、今までのように日曜日の午後ではなく、金曜日の午後6時に開始された。雑誌『歌劇』47号（大正13年2月号）における宣伝欄（58～59頁）は、この演奏会が同誌の愛読者400名を招待する公演として開かれるものであることを示しており、その最初に次のような文章が記されている。「宝塚音楽歌劇学校教授ラスカ氏は露西亜有数のシンフォニーのコンダクターとして全露に名を轟かし、最近まで浦鹽に於てコンダクターでありましたが、同氏昨年来宝以来、宝塚に於ても同氏をコンダクターとし全学校を上げてシンフォニーを組織し、爾来汲々その練習に余念なかったのでありますが来る二月八日午後六時より宝塚新温泉パラダイス三階に於て第一回演奏をすることになりました。／この微々たる関西の音楽界に今度のシンフォニー・コンサートの開催は一つのエポックを作るであらうことを信じて疑ひませぬ。／今更シンフォニーの偉大を説く必要はありますまい。よき音楽を持たぬ関西の音楽愛好家には絶大の福音でありませう（後略）」。これはまさに関西におけるオーケストラ音楽活動の開始を高らかに謳いあげたプロパガンダであるが、こうして行われた演奏会では管弦楽のほか、フルート独奏、弦楽合奏、合唱、独唱、ピアノ独奏と、さまざまな演奏形態が舞台を彩ることとなった。管弦楽は「全管絃樂部」として60名が出演している。曲目には「第一回」にふさわしく初めて交響曲が採り入れられ、ハイドンのいわゆる《太鼓連打》、すなわち第103番 変ホ長調が最後の「第四部」に演奏された。また「第一部」の初めにモーツァルトの歌劇《皇帝ティートの慈悲》序曲が演奏されている。この演奏会は後の「定期演奏会」に連なる営みの発端となったのである。

この後、ラスカに関連する大きな出来事は、ほぼ2週間後の2月23日午後6時より、大阪中之島中央公会堂にて全関西婦人連合会主催、大阪朝日新聞社の後援により「宝塚音楽歌劇学校大演奏会」が開かれたことであり、

ここでも先と同様のモーツァルトとハイドンの作品が、彼の指揮によって演奏されている。

大阪での演奏会の後、ラスカの指揮による主な管弦楽曲の演奏を見ると、同年すなわち1924年6月21・22日（午後6時半開会）には宝塚新温泉パラダイス小劇場にてベートーヴェンの序曲《コリオラン》、モーツァルトの交響曲第40番ト短調が演奏されている。またこの日にはラスカ自身の《歌謡調》（2つの歌曲）が演奏されており、プログラムの「演奏曲目解説」に「幻想に富める狂想的な歌謡調である。その間奏の和音に頗る近代的な手法が取入れられてある」と記されている。なお池田文庫所蔵の同演奏会のプログラムには、英字で「THE SECOND SYMPHONY CONCERT」と印刷されているほか、赤鉛筆による「重要プログラム　楽団と生徒がはじめて分離した　大13．6・」という記入が見られる。

その後、定期演奏会開始までに開かれた演奏会について、プログラムの資料は少ないが、『宝塚音楽講演集第一輯』（1927年（昭和2）2月頃に刊行された）に上記1924年6月からの演奏会の「演奏目録」が収められており、それによれば同年9月17日に神戸青年会館でベートーヴェンの《コリオラン》や、ハイドンの「交響楽」（曲番は不明）が演奏され、9月24日には京都岡崎公会堂での演奏会が行われている。

翌1925年（大正14）1月24日には再び『歌劇』愛読者大会として、はじめて宝塚大劇場を会場として行われ、シューベルトの《未完成》などが演奏されている。さらに同年2月13・14日には再び大阪の中之島中央公会堂で前回同様全関西婦人連合会主催、大阪朝日新聞社後援により、ベートーヴェンの《田園》などが演奏されている。同8月20日も大劇場でメンデルスゾーンの交響曲第3番《スコットランド》などの演奏が行われている。もちろんこの時期には他にも演奏会が行われているが、資料の欠落のため、記すことができない。

1926年（大正15）には3月21日、4月24日に小劇場、5月22日にも小劇場で行われ［ベートーヴェンの交響曲第2番など］、6月19日には神戸の旧関西学院講堂で、7月24日、8月15日、8月26日［ベートーヴェンの交響曲第3番「英雄」など］には大劇場で、演奏会が行われている。そして同年9月18日にいよいよ第1回定期演奏会が開かれるのである。

以上の「研究会」段階における演奏会の回数を資料的に確定することは難しい。ただ、興味深いことに1926年8月15日の演奏会のプログラムの英語部分に「THE 8TH CLASSICAL SYMPHONIC CONCERT OF TAKARAZUKA SYMPHONY SOCIETY」というタイトルが記されている。これがなぜ「第8回」であるのかは不明であるが、そのまま数えると次の8月26日は「第9回」ということになる。つまり定期演奏会が開始される前に9回の「シンフォニー・コンサート」がいわば準備的プロセスとして開かれていたことになるのだが、この回数は後に触れる定期演奏会の累次の問題を解決する材料にはならない。

以上、定期演奏会が開始されるまでの準備状況をラスカの仕事を中心に捉えてみた。ラスカはこの後、1935年（昭和10）6月22日の「第112回定期演奏会」に至るまで精力的に活動し、関西の音楽文化に多大の貢献をしてゆく。しかし本稿では、彼の最も重要な仕事の一つであるこの定期演奏会について述べることは、あえて行わない。それは膨大な紙数を要するものであり、演奏曲目や作曲者たちや、演奏評価等、さまざまな面から総合的に考察を行う必要のある事柄だからである。ただし、彼の仕事がどのようにして終わったかについて、ここで短く触れておこう。

ラスカの退任は、彼の能力についての疑問などが周辺にあったようであるが、直接的にはきわめて外面的な事態の発生により、ほとんど突発的に生じたものである。神戸女学院大学史料室所蔵の『週報撮要』第27号25頁に美田節子という人の「着々前進の一路を辿り多事なりし今年の秋」と題

された報告記事（1935年11月25日付）があり、そこに次のような記述が見られる。「ところが夏休みを利用してモスクワに於ける音楽祭に列席の為に入露中でありました総指揮者ラスカ先生が九月末急ぎ御帰朝の途中敦賀で突如思ひがけなく上陸禁止との官命をお受けになりました。（中略）先生は日本を愛しつつ日本に容れられず遠く北の方の地へ去っておしまひになりました。日頃のあの温かい先生を知る私達は今はただ先生の御将来の御多幸ならんことをお祈りいたすのみでございます。」ラスカがいかなる理由で入国を許されなかったのかは調査を要する問題であるが、[6] いずれにしても彼はこの後再び日本に来ることはなかった。そして彼はウィーンで1964年（昭和39）11月14日、78年の生涯を閉じたのである。

3．宝塚交響楽団定期演奏会記録について

次に、「はじめに」で触れた「第1の課題」について述べることにしたい。私は大阪大学での新任の1ヶ月が過ぎてから、この調査のために久しぶりに池田文庫を訪ね、以前には見ることのできなかった宝塚歌劇団所蔵の資料や、宝塚交響楽団の末期段階における演奏会のポスター等を見せて頂いた。その結果、大部分の演奏会について基本的な内容を掘り起こすことが可能となり、今時点における「宝塚交響楽団定期演奏会記録」を作成することができた。次頁以下に、その「記録」から、年月日、回、演奏された場所、指揮者、そして曲目・演奏者等のデータの根拠となる資料、に絞った一覧表を掲げておく。[7]

この表は紙面の制約上、曲目と演奏者（独奏者）等を記していないので、外面的な活動像を示すにとどまるが、個々の演奏会の中身等については「資料」によって知ることができるようになっている。しかし現在の段階で、なお次のようにいくつか不明な点が残されているのでお断りしておきたい。

①第108回ならびに第114回の内容が不明であること。『歌劇』第178号(昭和10年１月号）の137頁には「宝塚交響楽協会第一〇八回演奏会　一月下旬」との１行予告があり、この時期に第108回が計画されていたことは確かであるが、実施記録が残っていないのである。その理由として、１月25日の朝に出火し、大劇場の内部を全焼するという事態が発生したために、急遽公演が中止されたことが考えられる。ちなみに翌月号の『歌劇』の最後に記されている「宝塚少女歌劇団日誌」の最後の日付である１月23日までに、この演奏会が実施されたという記録は見られない。第114回については、『歌劇』第184号(昭和10年７月号）の86頁に「質的にも量的にも充実した関西唯一の/宝塚交響楽協会第一一四回演奏会/七月中旬大劇場に於て開催の予定」と記されているが、７月には記録上一つも演奏会が行われておらず、８月10日に「須藤五郎氏渡欧送別大演奏会」が開かれることになったために、一月遅れの８月20日に延期になったのではないかと推察される。この演奏会も『宝塚歌劇五十年史別冊』(宝塚歌劇団出版部発行、1964年）に、「朝日会館で定期演奏会主催。指揮は近衛秀麿。」と記されている以外には資料が見当たらず、曲目等につきなお探索中である。[8)]

②累次の問題。すでに「宝塚交響楽協会の活動に関する未整理資料について」でも指摘したが、プログラム等において回数の記載が欠けている場合が少なくない。特に「第10回」のあとは、プログラム等に回数の数字が記されていない状態がしばらく続き、次に数字が出てくるのは「第47回」である。この47回という数字が用いられた理由として、定期演奏会の前史ともいうべき宝塚音楽研究会段階の演奏会が数え入れられている可能性があることを先の稿でも指摘したが、決定的な数的関係を解くことはできず、回数の扱いについて主催者側が説明したような文書でも現れない限り、この累次問題は解決されないであろう。

③最後に、以上の諸資料は大部分がプログラム等の、いわば「事前情報

宝塚交響楽団定期演奏会記録

年月日	回	所	指	資
1926（大正15）				
09.18	第 1 回	宝	L	○
10.16	第 2 回	宝	L	△
11.11	第 3 回	大	L	△
11.20	第 4 回	宝	L	△
1927（昭和 2）				
01.22	第 5 回	宝	L	○
02.19	第 6 回	宝	L	○
03.26	第 7 回	宝	L	○
04.09	第 8 回	宝	L	○
04.23	第 9 回	宝	L	○
05.21	第 10 回	宝	L	○
06.18	第 11 回	宝	L	○
07.23	第 12 回	宝	L	○
08.20	第 13 回	宝	L	○
09.17	第 14 回	宝	L	○
10.22	第 15 回	宝	L	○
11.19	第 16 回	宝	L	○
12.17	第 17 回	宝	L	○
1928（昭和 3）				
01.21	第 18 回	宝	L	○
02.18	第 19 回	宝	L	○
03.17	第 20 回	宝	L	○
05.19	第 21 回	宝	L	○
06.14	第 22 回	神	L	○
07.21	第 47 回	宝	L	○
08.25	第 48 回	宝	L	○
09.22	第 49 回	宝	L	○
10.20	第 50 回	宝	L	○
12.08	第 51 回	宝	L	○
1929（昭和 4）				
01.19	第 52 回	宝	L	○
02.23	第 53 回	宝	L	○
04.25	第 54 回	宝	高木和夫	○
05.18	第 55 回	宝	L	○
06.25	第 56 回	宝	L	○
07.20	第 57 回	宝	L	○
08.17	第 58 回	宝	L	○
09.21	第 59 回	宝	L	○
10.26	第 60 回	宝	L	○
11.20	第61回	宝	L	○
12.21	第62回	宝	L	○
1930（昭和 5）				
01.18	第 63 回	宝	L	○
02.22	第 64 回	宝	L	○
03.20	第 65 回	宝	L	○
04.19	第 66 回	宝	L	○
08.09	第 67 回	宝	L	○
09.23	第 68 回	宝	L	○
10.16	第 69 回	宝	L	○
11.12	第 70 回	宝	L	○
12.20	第 71 回	宝	L	○
1931（昭和 6）				
01.24	第 72 回	宝	L	○
02.17	第 73 回－1	大	L	○
02.24	第 73 回－2	神	L	○
03.18	第 74 回－1	大	L	○
03.19	第 74 回－2	神	L	○
04.24	第 75 回	宝	L	○
05.20	第 76 回	宝	L	○
06.22	第 77 回－1	大	L	○
06.23	第 77 回－2	神	L	○
07.18	第 78 回－1	大	L	○
07.21	第 78 回－2	神	L	○
08.22	第 79 回	宝	L	○
09.17	第 80 回－1	神	L	○
09.18	第 80 回－2	大	L	○
10.21	第 81 回－1	神	L	○
10.22	第 81 回－2	大	L	○
11.25	第 82 回	宝	L	○
12.19	第 83 回	宝	L	○
1932（昭和 7）				
01.20	第 84 回	大	L	○
02.20	第 85 回	宝	中川榮三	○
03.16	第 86 回	宝	山田耕筰	○

04.20	第87回	宝	L	○
05.17	第88回	大	L	○
06.18	第89回	宝	L	○
07.14	第90回	大	山田耕筰	○
09.10	第91回－1	大	L/中川榮三	○
09.12	第91回－2	神	L/中川榮三	○
11.17	第92回	大	L	○
12.20	第93回	宝	L	○
1933（昭和8）				
02.22	第94回	宝	L	○
03.15	第95回	大	中川榮三/L	○
05.24	第96回	大	L	○
06.26	第97回	大	山田耕筰	○
07.14	第98回	宝	L	○
09.25	第99回	宝	竹内平吉	○
10.24	第99回	宝	L	○
11.22	第100回	宝	L	○
12.16	第101回	宝	L	○
1934（昭和9）				
04.10	第102回	大	山田耕筰	○
05.21	第103回	宝	L	○
06.23	第104回	宝	L	○
09.17	第105回－1	大	篠原正雄	○
09.18	第105回－2	大	篠原正雄	○
10.16	第106回	大	L	○
11.12	第107回	大	山田耕筰	▽
1935（昭和10）				
01.？	第108回	？	？	×
02.25	第109回	京	山田耕筰	▽
03.16	第110回	宝	L	○
04.20	第111回	宝	竹内平吉	○
05.11	第112回	神	L	○
06.22	第112回	宝	L	○
08.20	第114回	大	近衛秀麿	×
10.19	第115回		中　止	
1936（昭和11）				
02.21	第116回	宝	山田耕筰	○
03.24	第117回	大	貴志康一	▽
05.16	第118回	宝	貴志康一	○
06.23	第119回	大	大沢寿人	▽
11.20	第120回	宝	須藤五郎	○
1937（昭和12）				
03.23	第121回	宝	山本直忠	○
12.04	第122回	宝	フェッチ	○
1938（昭和13）				
05.24	第123回	宝	フェッチ	○
11.22	第124回	宝	フェッチ	○
1939（昭和14）				
04.28	第125回	宝	フェッチ	□
1940（昭和15）				
07.13	第126回	宝	フェッチ	○
1941（昭和16）				
05.17	第127回	宝	フェッチ	□
09.06	第128回	宝	フェッチ	□
1942（昭和17）				
03.14	第129回	宝	フェッチ	○

☆アンダーラインの部分は、資料に記載がないため、推定による。同じプログラムで複数日にわたって上演しているものには枝番号を付す。第99回については、2つの異なる演奏会のプログラムに同一の番号が記されている。第112回は前後関係から、実際には第113回にあたるものと判断されうる。

☆「所」欄　宝＝宝塚；大＝大阪；神＝神戸；京＝京都を示す。

☆「指」欄　指揮者を示す。L＝ラスカ。

☆「資」欄　曲目、演奏者等のデータの根拠となる資料を示す。複数の種類を得ている場合には、以下の順を優先順位とし、一種類のみ掲げる。○＝池田文庫所蔵の諸種プログラム；□＝同ポスター；△＝同新聞切抜帳貼付の記事；▽＝『大阪音楽文化史資料昭和編』所収の新聞記事；×＝上記のいずれの資料もないもの。

※この一覧表は1998年8月31日までの調査に基づくものである。

資料」であり、実際にその内容通りに演奏会が実施されたかとなると、百パーセントそうであったと断言することはできない。例えば昭和2年4月23日の「第9回」はプログラムではベートーヴェンの交響曲第7番が予定されていたが、当日になって第2番に変更された。このことはある新聞にこの曲目の変更に憤慨した読者の投稿記事が掲載されており、[9] それによって知り得たのである。また昭和3年12月1日に予定されていた第51回は翌週8日に変更されたことが『歌劇』第106号（昭和4年1月号）182頁に記載の「宝塚少女歌劇団日誌」などからわかる。さらに「第115回」の指揮者ははじめメッテルが予定されていたが、彼の突然のキャンセルにより「中止」となった。[10] なお新聞記事については予告を中心に『大阪音楽文化史資料昭和編』（大阪音楽大学音楽文化研究所編、1970年）に相当数収録されており、これによって知りえたものが少なくない。今後さらに、批評記事や、欠落しているプログラムの発見なども、あり得るであろう。いずれにしても、これからも調査を続けてゆくことにより、すべての回の内容を明らかにすることを目指しているので、もし何らかの情報を得ている方がおられたら、ぜひ知らせて頂きたいと思う。またもし間違った点があれば、これも遠慮なくご指摘頂ければ幸いである。

4．ヨーゼフ・ラスカの音楽作品とその意義について

次に第2の課題であるが、池田文庫にはラスカやこの楽団に関わる楽譜資料は無い、ということが判明した。楽譜資料として期待していたのは、指揮者用スコアや、各団員が用いたパート譜であり、これを見ることができれば、ラスカの演奏解釈の内容が（音そのものでなくとも）ある程度解明されるであろうと考えていたのであるが、その可能性はほとんど失われたのである。そこでもう一つ、第3の課題に移りたい。それはラスカの音楽作品についての研究である。

前述のように、私はリンツで得た資料によって、ラスカが多くの作品を書いていること、またその曲名を知りえたのであるが、作品そのものが得られないのは何ともはがゆいことと思っていた。しかし彼が宝塚交響楽団の仕事のかたわら、神戸女学院で教えていたことに想いをいたし、同学に問い合わせたところ、史料室に彼に関する記録事項がまとめられており、それを参照することができた。（この資料によってラスカが1928年４月、音楽部の楽式論、合唱、管弦楽、対位法の教授として着任したことが判った。なお先に挙げたラスカの退任に関わる出来事を記した記事も、このときに頂いた資料に含まれている。）その後、音楽学部の図書館に彼の作品が13曲所蔵されていることを知らされ、私はそれらを実際に手にとることができたのであるが、それが実現したのはこの『待兼山論叢』の原稿締切の月となる本年（1998）８月に入ってのことであった。それゆえ十分な研究のための時間を得ていないのであるが、以下に若干の考察を行いたい。初めに、今回扱い得た楽譜の全体像を示そう。（A～Eは前出Unfriedによる記事の末尾における作品表のジャンル配列に準じて設けたものであり、各項末尾に同図書館における資料の態様を示す。）

A. 連作歌曲

1) Aus ,,Briefe und Tagebuchblätter" Paula Modersohn-Becker (1.Gebet; 2.Schatten meiner Seele; 3.Der Abend) ［パウラ・モーダーゾーン=ベッカー『書簡と日記帳』より　1.〈祈り〉、2.〈わたしの心の影〉、3.〈夕べ〉］（自筆譜複写）

2) 10 Japanische Kurzgedichte in Musik gesetzt［日本俳句及短歌十首］作曲：1933年８月、神戸（出版譜：The Kobe & Osaka Press, LTD., 神戸）

3) 3 Lieder (1.Traumwald [Morgenstern]; 2.Schlummerlied

[Mombert]; 3.Schauder [Morgenstern]) ［3つの歌曲　1.夢の森［モルゲンシュテルン］、2.まどろみの歌［モンベルト］、3.戦慄［モルゲンシュテルン］］（自筆譜複写）

B. 連作歌曲より

4) Buddistische Glocke [H. Bohner]［梵鐘　歌詞：H．ボーナー］（Lieder des Ostens ［東方の歌］第1曲）（自筆譜複写）

5) Der Regen von Jogashima [Übersetzt aus dem Japanischen von J.Shiger und H.Bohner]［城ヶ島の雨　歌詞：日本語よりJ.シゲル（？）とH．ボーナーが翻訳］（Lieder des Ostens ［東方の歌］第2曲）（自筆譜複写）

C. 合唱曲

6) Psalm 13 ［詩編第13篇］（他人の手による筆写譜）

D. ピアノ独奏曲

7) Bilder aus Japan. 10 Klavierstücke［日本の絵　10のピアノ小品］作曲：1934年、神戸（自費出版譜：1934年）

8) Japanische Melodien　Heft 1 ［日本の旋律　第1集：1～12番］（自筆譜複写）

9) Japanische Melodien　Heft 2 ［日本の旋律　第2集：13～19番］（出版譜：Ries & Erler G.M.B.H./Berlin）。なお8）と9）をあわせて《24の日本の旋律》とする扱い（宝塚交響楽団プログラム・ガイド1933年5月など）もあるが、私が現物を見た限りでは、第2集には上記のとおり、7曲しか含まれていなかった。

10) Valse Capriccio［ワルツ・カプリッチョ］作曲：1932年2月29日（自筆譜複写）

11) Aus Japan　Präludium,　Etude und Fuge［日本より　前奏

曲、練習曲そしてフーガ］（自筆譜複写）

12)　3 Humoresken［3つのフモレスケ］（自筆譜複写）

E. 室内楽曲

13)　„Nara" 3 Stücke für Flöte und Klavier (1.Tempelfriede; 2.Die heiligen Rehe; 3.Daibutsu)［奈良 フルートとピアノのための3つの小品　1.寺院の静寂、2.聖なる鹿たち、3.大仏］（自筆譜複写）

これらは彼の全作品の1割ほどでしかないが、私はさっそく大部分の曲を何人かの若い音楽家たちに頼んで、ごく短期間に実際の音にしてもらい、まさに「音楽」として感得することができた。その結果彼の音楽作品について暫定的な所見として、およそ次の二つのことを語ることができよう。

1）第一次世界大戦に従軍し、捕虜として、シベリア、ウラジオストックを経て、日本に移ってくる、という道筋のゆえに、ヨーロッパ音楽からずいぶん遠ざかったと思えるにもかかわらず、彼の音楽の語法は、ドビュッシーなど、今世紀初頭のスタイルを反映したものとなっている。しかも単に「指揮者の作曲」という副次的な仕事ではなく、独自な個性を発揮している面が少なくない。例えば《3つの歌曲》は、シェーンベルクやベルクの歌曲とも通じる先鋭的な表出をもつ作品である。この曲の楽譜には表紙に「世界音楽歌唱連盟の歌曲創作コンクールに入賞。ウィーン、1925年10月25日」と記されており、実際に試演を聴いてみても、今日あらためてレパートリーに含み入れられるべき優れた作品であることがわかる。

2）ラスカの作品で特に注目すべき点は日本の風物や文学を音楽化していることである。上に示した作品では、2、4、5、7、8、9、11、13がこれに属する。これは文化の相互交流の観点からきわめて意義深いことがらであり、まず、ラスカが日本の文学や音楽を真摯に共感をもって

受け入れ、それを新たな創作に結晶せしめていること、さらにそうして出来た作品が演奏を通じて日本の聴衆に受けとめられている、ということで、ここには文化のフィードバックが見られるのである。これらの8曲は、さらに次のように細分されうるであろう。

①日本の音楽を編曲したもの ── 8)、9)。ここには〈Kisobushi〉(第1集第3番)や〈Sakura・Sakura〉(第2集第14番)など、よく知られた民謡、古謡に基づくものが多いが、あまり聞いたことのないような曲名も少なくなく、原曲を探索して、その扱いがどのようになされているかを調べることが、研究の課題となろう。なかには〈Bokuno Geisha〉と題する曲(第2集第11番)もあり、素材をすべて同定することは困難な作業となるかもしれない。

②日本の音階組織を素材の一部として用いているもの ── 11)。この曲は例えばフランクの《前奏曲、コラールそしてフーガ》と同じタイプの多楽章構成の作品であるが、題名の「日本よりAus Japan」という部分が暗示するように、前奏曲とフーガに共通する主題が、律音階によって作られている。これはドヴォルザークの交響曲第9番(当時は第5番)が「新世界よりAus der Neuen Welt」と題され、アメリカの音楽の素材を採り入れた作品であることに、ヒントを得たものともいえよう。

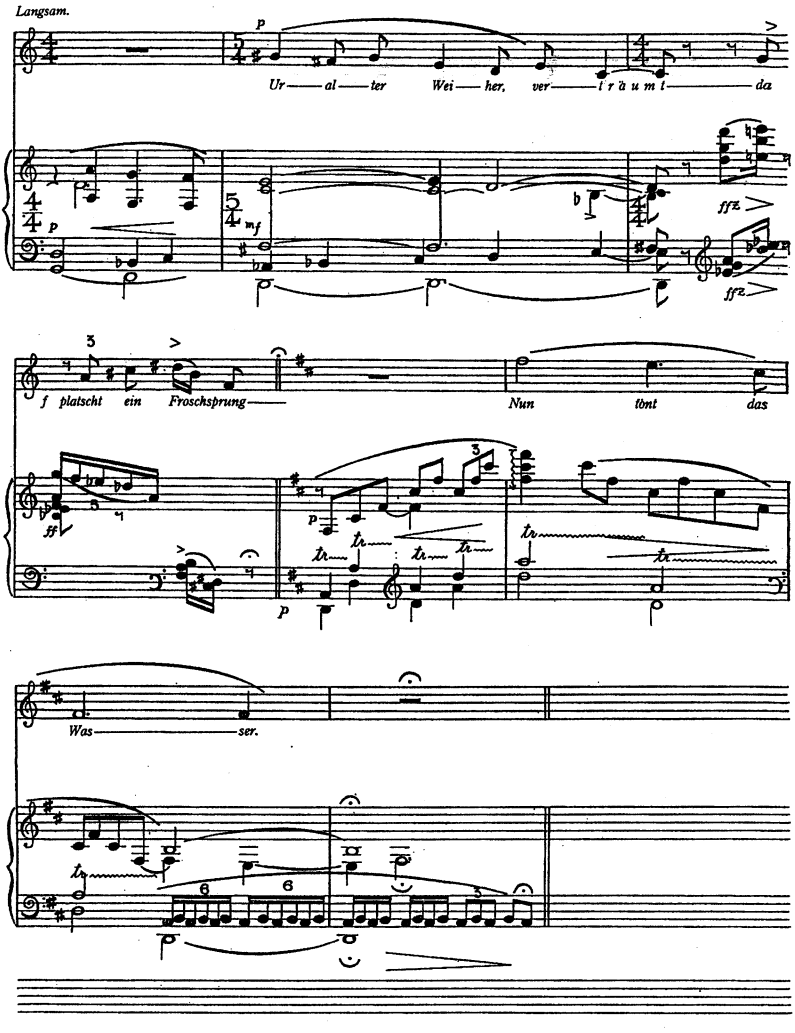
③日本の情景から着想を得たもの ── 4)、7)、13)。ラスカの日本での生活についてはまだほとんど判らないのが現在の状況であるが、少なくとも彼が日本の文化のさまざまな面について親しい共感を抱いていたことが窺える。《日本の絵》には〈追羽子〉〈虚無僧〉〈猿まわし〉〈芸者の悲哀〉といった曲があり、日常の風物をピアノで描写することが試みられている。また歌曲の《梵鐘》ならびにフルートとピアノのための《奈良》は彼が奈良を訪ね、またおそらく友人が記した日本の鐘の印象に呼応しつつ、きわめて独自な東洋の幻想的な美の世界を音楽化した作品と評しえよ

う。語法的には全音音階がかなり頻繁に用いられるが、純粋に半音階的な動きを避け、耳に親しみやすい音楽となっている。なお《奈良》の第３曲〈大仏〉は、1933年７月14日の第98回定期演奏会において川口勝治郎のフルートとラスカのピアノにより、演奏されている。

④文学作品から着想を得たもの ── ２）、５）。ラスカは音楽や風物だけでなく、日本語による文学にも多大な関心を示し、この他にも、高声とピアノのための《５つの万葉集歌曲》や、アルトとフルートとピアノのための《７つの短歌》を作曲していることが分かっている。《日本俳句及短歌十首》には芭蕉の俳句が３つ、古今集から２首のほか、定型的でない短詩なども用いられているが、興味深いことに楽譜の左側の頁にもとの日本語の詩と、そのドイツ語訳、英語訳を載せ、右側の頁にドイツ語訳の歌詞による曲を載せている。つまり音楽もごく短く、簡潔に６〜９小節に収めている。すでにストラヴィンスキーも山部赤人らの歌による《日本の３つの抒情詩》（1912〜13）を書いているが、ラスカの作品は日本の短詩の伝統がもっと徹底した形でヨーロッパの作曲家に与えた影響といえよう。**譜例**に第１番を掲げておく。この曲では芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」が音楽化されており、最初の２小節における古池の静けさ（歌の旋律とピアノの内声部に、互いに反行の関係をなす全音音階の動きが見られる）、３小節目で蛙がポシャ！と飛び込んだ様子、フェルマータをおいて水の動きを暗示するピアノのトリル、そしてまたもとの静けさ、というように句のもつ雰囲気を実に印象深く音楽化している。なおこの歌曲集は1933年10月24日の第99回定期演奏会で、野崎住子のソプラノとラスカのピアノにより演奏されている。もう一つ、５）の《城ヶ島の雨》は、北原白秋の詩に基づく作品である。この詩に大正２年（1913）梁田貞が付曲した歌はあまりに有名であり、ラスカの曲より数年前に書かれた橋本国彦の付曲も知られているが、ラスカの曲は音画的な要素もふんだんに持ち込み、新しい歌曲

譜 例

No. 1


Langsam.
Ur — al — ter Wei — her, ver — l r ä u m t — da
f platscht ein Froschsprung —
Nun tönt das
Was — ser.

の表現を作り出している。ラスカが白秋と同じ城ヶ島の情景を見た可能性は十分にあり、梁田らの曲も十分知っていたと考えられる。したがって、ここには日本的なるものが情景、文学、音楽という重層的な構造を保ったままヨーロッパの音楽家に受け容れられ、それが新たな創作を招来したということができよう。

以上、ラスカという大正時代末期から昭和十年まで、関西で音楽活動を展開したオーストリア人の仕事をめぐって、一連の調査報告と考察を行った。まだまだ調べるべきことは多いが、本論を出発点として、定期演奏会の活動内容の解析を含む、包括的な研究を行っていきたいと思う。[11)]

注

1)　本稿では旧字体による漢字表記は、原則として新字体に改めることにした。

2)　この受容研究の仕事は当日（1991年９月21日）の発表の後、次に挙げる諸論考において順次発表された。(1)「ブルックナー受容の時」：『日本経済新聞』大阪本社版、1992年１月10日夕刊、11頁　(2)「日本におけるブルックナー受容」：根岸一美・渡辺裕監修『ブルックナー/マーラー事典』、東京書籍、1993年10月、284～290頁　(3)Bruckner-Rezeption im asiatischen Raum - am Beispiel Japans: *Bruckner-Symposion 1991 Bericht* (Anton Bruckner Institut Linz/ Linzer Veranstaltungsgesellschaft mbH, Linz 1994) S.201-210[シンポジウム報告書]　(4)Art. “Rezeption - Asien”, in: *Anton Bruckner - Ein Handbuch* (Residenz Verlag, Salzburg u. Wien 1996), S.353.

3)　この資料には「1957VI-7」の日付印と「AMTL.LINZER ZEITG Jg.1 Nr.11 S.387f」の資料出典の記載があるが、最初からこの官報に掲載されたものであるのかは、まだ確認していない。

4)　『館報池田文庫第７号』1995年４月、６～８頁；『同第８号』1995年10月、９～11頁。

5)　ラスカに関する以下の記述は、主として前出 Johannes Unfried による。

6)　本稿を書き上げた後、池田文庫所蔵の宝塚歌劇関係新聞記事切抜帳に、1935年（昭和10）10月４日、６日の『大阪毎日新聞』ならびに10日の『大阪日日新聞』の記事を読むことができた（同文庫辰田昭子氏の調査による）が、

複雑な事情を示す内容であるため、ここでは言及しないでおく。

7) この表は私自身の調査に基づき、大阪音楽大学の三村利恵氏に作成して頂いた。

8) 当時の『大阪毎日新聞』および『大阪朝日新聞』を調べてみたが、この演奏会についての記事は見当たらず、さらに後者の8月20日朝刊における「朝日会館／今日」の欄には、映画会の案内が載せられていた。従ってこの日には演奏会は行われず、10日の演奏会が第114回として位置づけられた可能性も考えられる。

9) 『大阪日日新聞』1927年（昭和2）4月26日。池田文庫所蔵の切抜帳貼付記事による。

10) 『大阪時事新報』1935年（昭和10）10月27日掲載記事。大阪音楽大学音楽文化研究所編『大阪音楽文化史資料昭和編』229頁による。

11) Irene Suchy :Compositions of German musicians in Japan from 1872 to 1945（1990年に大阪で開かれた国際音楽学会のシンポジウム報告書 *"Tradition and its future in music. Report of SIMS 1990 Osaka"* Tokyo-Osaka: Mita Press 1991, p.475-484）によって、ラスカの作品の自筆譜が、ウィーンの国立図書館、リンツのブルックナー音楽院の所蔵となっていることを最近知った（お茶の水女子大学徳丸吉彦教授のご教示による）。なお本稿作成中に本学大学院生奥中康人君より、ラスカの以下の論考を教えられた。Joseph Laska: Die Musik Japans, in: *Die Musik* XX/3, Dezember 1927, S.176-182. 今後の研究において改めて取り上げることとしたい。

（文学部教授）

追記（訂正） 神戸女学院所蔵のラスカの作品の資料の多くについて、本論文では「自筆譜複写」と記したが、1999年におこなったオーストリアの各図書館 における調査から、それが誤りであることが判った。13～15頁に（ ）内に示した「自筆譜複写」（全9個所）はいずれも正しくは「他人による筆写譜の複 写」である。また3頁7～10行目、4頁3行目において、ラスカが関東大震災のために東京から関西に移ってきたむねの記述をおこなったが、1999年に初 めて見ることのできたラスカ夫人エレンの手記（オーストリア国立図書館音楽部門所蔵）によれば、ラスカは「ある大きなオーケストラからの招請により」ウラ ディオストクを出て横浜港に向かったが、1923年9月3日に敦賀港に到着したものの、9月1日に起こった関東大震災のためにそのさき横浜に向かうことは 不可能になったという。その後も、震災による混乱などや、早くも9月16日には宝塚音楽研究会に登場していることなどを考え合わせると、ラスカが10月 16日に宝塚音楽歌劇学校の教授に着任するまでの間に、東京で仕事をした可能性はほとんどなかったと言えるだろう。（2010年9月24日）